



タンゴイン エデン

あずま渡里



タンゴ イン エデン

あずま渡里

スペシャル

今日のアルは、機嫌が悪い。

軍の食堂で、昼飯のコロッケをつつきながらオレは思い、だけどすぐに訂正した。『今日』だと、語弊がある。今朝までは、いつも通りのアルだったんだ。

(朝、オレよりも先に起きて……)

オレの為に、美味しい朝飯を作ってくれた。

それから寝ているオレを優しく起こしてくれて、飯を食うオレの髪を結ってくれて。

軍服の上着を羽織らせて、襟を直した後、一緒に出勤して来たんだ——。

(……改めて振り返ってみると、恥ずかしいな。オイ)

照れ臭くなり、つづいていたコロッケを今度はフォークで崩していく。

だけでも、そんなオレに対してアルは何も言わない。いつもなら、食べ物をおモチャにするなど叱るのに、だ。(多分、傍から見ると解んねえんだろうな?)

チラ、と目の前で黙々と食事をする弟を見て、思う。そんな場合じゃないんだけど、思わず優越感に浸ってしまふ。

オレと違って、別に怒っているからって眉間に皺を寄せたり、食事に八つ当りをしたりしている訳じゃない。でも、だからっていつも通りかかっていうと、それは違う。

さっき上げたこともあるが、何よりオレと目を合わせないって辺りで、決定的だ。

(オレが悪ければ、ハッキリ言ってくる)

それなのに、アルがこういう態度を取るってことは——怒ってるけど、それはオレのせいだけじゃないってこ

とで。

だから、オレに怒る前に、自分の気持ちをグッと抑え込んでることだ。

「……なあ、どうした？」

それなら、遠慮することはない。

いや、むしろオレから切り出さないとアルの奴、どんどんグルグルしちまうし。だから、と尋ねたオレに、アルは大きく目を見張った。

何故、どうして。

そう問いつけてくる眼差しに、オレは笑いそうになるのを必死に堪えた。今、相手の機嫌を損ねては、話が進まない。

(何でって……)

オレが、お前の兄貴だからだろうが。

声に出さずに答えると、しばしの沈黙の後——何かを考えるように下を向いたアルが、口を開いた。

「……兄さんさつき、中庭で居眠りしてたよね？」

「あつ……？」

確かに、居眠りはしていた。

陽射しはすっかりぼかぼかの春、吹く風も気持ち良いばかりで。

准将に押しつけられた書類をようやく片付けたこともあり、自分へのささやかなご褒美に昼寝と洒落込んでいたのだ。

「あれは……その……」

「知ってる。マスタング准将に頼まれてた書類提出、終わったんでしよう？」

仕事をサボって、と怒られるとばかり思っていたので、返された言葉に戸惑った。

そんなオレに顔を上げて、真っ直に見つめてきたかと思うと——何故だか赤くなりながら、アルは続けた。

「ボクだけじゃないよ。皆、エルリック中佐を起こさないようにって、気を付けてたから」

「アル……？」

「……兄さんの寝顔は、ボクだけのものだったのに」

ポツリ、と落ちた眩きに——オレは、息を呑んだ。

(……可愛いっ！ 可愛過ぎるぞ、弟よっ!!)

思わず叫んで抱きつきそうになったが、何とか堪える。ここは軍の食堂で、オレは中佐。アルは少佐でオレの副官、と呪文のように何度もくり返す。

それから、詰めていた息をはあつと吐いて——嬉しさに頬を緩めながら、オレは言った。

「じゃあ、代わりにお前だけの特別をやるよ。エドワードスペシャル、何がいい？」

オレの言葉に、今度はアルが息を呑む。そんな素直な反応に、思わずワクワクしながら答えを待つ。

すると不意に立ち上がり、オレの耳元に顔を近付けてきたかと思うと——。

「……』 『」

——その、言葉に。

真っ赤になって固まってしまったオレに、にっこりと笑って見せて。

アルは再びオレの前に腰掛けたかと思うと、中断していた昼食を再開した。

「兄さん？ その『元』コロッケ、残しちや駄目だよ？」

それから、オレの皿にあるコロッケの残骸に対してそう言っ——また、笑った。

メイクアウト

ああ、神様。真理様。

どうして一体、こんなことに？

「兄さんの髪、好きだよ」

そう言って、アルがオレに笑いかけてくる。蜜色の目を眩しそうに細めて、思わず見惚れずにはいられない表情で。

「光みたいで、触るとツヤツヤしてて気持ち良いんだ」

「そっ、そっか……」

ニコニコしながら続けられた言葉に、情けなくも声が上がってしまう。

……いや、声だけじゃない。

体もすっかり逃げる気満々なのに、ソファの背に後退を阻まれた状態だ。そして、アルの手に顔の両側を挟まれてるから、全く身動きが取れやしない。

(……まあ、蹴り入れりやあいんだろうけど)

オレの左足は、機械鎧のまままだ。いくら体格差があるとしても、生身に戻ったアルなんて簡単に吹っ飛ばせる。「目も好き。琥珀みたいで、吸い込まれそう」

(いや、お前の目の方がよっぽどヤバイからっ)

下手に刺激するのが怖くて、心の中だけでツツコミを入れるオレに、アルが笑みを深める。

その仕種に合わせてふ、と零れた吐息を感じるくらい、近い距離。

だけど、アルは直にはオレに触れてこない。ただ逆流し、頬に集中してる血が沸騰しそうな言葉を、極上の笑顔で延々と綴るだけだ。

……四年前、無事に元に戻ったアル。

誰よりも大切な弟で、誰にも渡したくない、こ……こここ、恋人でっ！

だけど、いつもならもつとさりげなかったり可愛かったり（十八の男を捕まえて可愛いもないが、事実なんだから仕方ない）するから、こんな——あからさまに口説いてくることは、今までほとんどなかった。

それが何で、こんなことに？

※

「あーっ、ムカつく！ あの准将っ!!」

帰宅と同時に苛立ちを軍服にぶつけ、ソファに叩きつけたオレに、先に帰っていたアルが目を見張る。

「どうしたの、兄さん？」

「どうもこうも！ 自分の女好きを棚に上げて、人のこと……だあああっ！」

「お、落ち着いて。ね？ 何があったの？」

思い出して歯噛みするオレを、アルがソファに促す。

それから、お茶の入ったカップを差し出してきたのを受け取り、一気に飲み干して——オレは、話し出した。

今日は会議があつたから、不本意ながらもオレは准将と一緒にだつた。

会議自体に問題はない。腹が立つのは、その前後でのことだ。

「ああ、髪を切ったんだね。よく似合っている」

「今日も、美味しいお茶をありがとう」

すれ違ったり会議の席にお茶を運んでくれた女性士官達に、准将がにこやかに声をかける。

まあ、言われた方は皆、嬉しそうだからせいぜい、ホークアイ中尉に睨まれるくらいだろうけど――。

「……これだから、たらしは」

「何を言う。これくらい、男なら言えて当然だろう？」

思わず呆れて呟くと、准将が笑いながら返してきた。

それだけでもムツとしたのに、続けられた言葉がまた腹立たしかった。

「まあ、いつまでもお子様な君には、無理だろうけどね？」

「だあれが、オシメもおしやぶりも取れない赤ん坊かつ!？」

「いや……准将も、そこまでは」

「大体、男がンなこと、いちいち言うかってーの!? 軽いつつーか、信用ならねえってゆーかつ!」
拳を握って力説していると――不意に、沈黙が落ちた。

「……アル？」

どうしたのかと目を上げたオレの両側に、そつと手が置かれる。

それから、戸惑いながらも見返したオレを、ジツと見つめてきて——アルはこの、意味不明な行動を取り出したのだ。

※

「抱き心地もいいよね。それに、すごく良い匂いがする」

「しっ、シャンプーじゃねえ？」

「違うよ。もつと甘くて、良い匂い……」

うっとりした声で言ったかと思うと、いきなりオレの首筋に顔を近付けてきて、クン、と鼻を鳴らす。

「大好き」

(うひやううっ!?)

耳元で甘く囁かれて、声に出さずに——と言うか出せないまま、絶叫する。

そして、パクパクと口を動かすことしか出来なくなったオレに目を合わせて、アルは言った。

「……軽く聞こえる？ 信じられない？」

「……えっ……？」

「兄さんが、嫌がると思ったから……気を付けてたけど。信用出来ないって理由なら……」

我慢、したくない。

そう言ったアルの顔を、しばしボンヤリと見つめて——。

「さつき、オレが言ったせいかつ!？」

思い至った途端、思わずオレは叫んでいた。

そんなオレの顔を、負けるものかというように睨みながら、アルが覗き込んでくる。

その目を、やれやれと見返しながら——オレは、何とか言葉を紡いだ。

「アル……もう、こういうのやめろ」

「嫌だ」

「……お前は、オレを殺す気か？」

即答するアルの肩に、ポスンと額を埋める。

そして「逆だ」と言っただけから、オレは続けた。

「強烈過ぎて……身が、保たねえ」

オレの言葉に、アルが息を呑む。

それから、背中に腕を回してきて——オレを抱き締めながら、言った。

「じゃあ、今度からは小出しにするね？」

「をい……」

「そうしたら、きつと慣れるよ」

クスクスと笑いながら、アルがオレの髪にスツと指を差し入れてくる。

そして、耳に触れてくるのが指から唇に替わったのに——恥ずかしいと思いつつも、どこか安心しながらオレは目を閉じた。

タンゴインエデン

「カッコよく、エスコートしたいんだ」

鎧だから、表情は変わらない。

だけど、確かに本気を感じさせる声で、アルは言った。

※

正式に軍に入つて、まず驚いたのは人間関係の妙な繋がりについてだった。

直接の縦横ならまだ解る。

だけど『上官の恩師の息子』とか『前に配属地が同じ』とか。挙げ句の果てに『数ヶ月、教育で同じ飯を食った』なんて理由で結婚式や送別会なんかの誘いが来ることに、最初は首を傾げるばかりだった。

だから、今日のはまだ解りやすい。

軍に入ってから——いや、それ以前から何かと世話になっていた、書庫の管理者の退任祝賀パーティーだからだ。

当の本人は、礼装姿で奥さんと踊っている。最初は主役の二人で、そしてこの後は他の招待客が進み出て、ダンスパーティーになるのが常だ。

もつともオレはこういう時は、サンドイツやチキンを齧りながら踊る面々を眺めてる。常に壁の花なオレに呆れてるのか時折、チラチラと視線を感じるが踊れないんだから仕方ない。

(……けど、あいつは)

チラ、とオレは飲み物を取りに行ってくれたアルに目をやった。

副官としてオレ同様、礼服に身を包んだアルは惚れ惚れするばかりの男前だ。

そんな風に思うのはオレだけじゃないらしく、女性陣はずっとアルに熱い眼差しを送っている。特にダンスが始まった今は、一曲踊りたいんだろう。ソワソワしたり、声をかけようとしたり。少し離れた場所にいるオレにまで、その熱気が伝わってくる。

(……けど)

アルは、今まで一度も踊っていない——オレと違って、あんなに上手なのに。

(あつ……)

不意に、曲調が変わった。

オレは知らなかったけど、どうやら主役の准尉夫妻はダンスが得意らしい。滅多にこういう場では流れないタンゴにも、動じること無く悠然と踊ってる。

「兄さん」

一組、また一組と戻ってくるカツプルを見ていたオレに、アルが声をかけてきた。ちょうど食い終わったところだったんで、飲み物を受け取ろうと手を出したが、見ると差し出された手は空である。

あれ、と首を傾げて目を上げたオレの手を取って。

「踊ろう、兄さん」

にここにここに。

笑顔でそう言ったかと思うと——アルは驚くオレの手を握り、いきなりダンスフロアに引つ張り出しやがった！

兄弟、しかも男同士で前に出たオレ達に、周りの視線が集中する。

「アル！ 何、考えてやがるっ!？」

「何って……兄さん、ワルツよりこつちの方が好きでしよう？」

人前で怒鳴るのとも思つて小声で尋ねたが、返されたのは相変わらずの笑顔とどぼけた答えだ。そしてオレの抗議を余所に、曲に合わせて一步踏み出す。

「……チツ！」

棒立ちになったら、アルに恥をかかせることになる。

だから舌打ちしつつも、オレも足を踏み出した。それから二人で数歩進み、その勢いのまま旋回して。

「……終わったら、どういうことか説明しろよ」

ピタリ、と止まったところでアルにだけ聞こえる声で囁き、睨み付けると——何故だか、アルは破顔した。

※

「カッコよく、エスコートしたいんだ」

元に戻るまでの旅の中。

野宿をしていたある日、アルは不意にそう言ったかと思うと、鎧の中からダンスの入門書を取り出した。

男がダンスなんて、とは思つた。

だけど一方で、アルが望むんなら何だつて叶えてやりたいと思つたから、練習に付き合つてやった。元々、運動神経の良いアルはすぐに上手に踊れるようになったし、覚える気皆無のオレでも女性パート『だけ』は踊れるようになった。

……確かに、タンゴはスピード感とかメリハリがイカしてる。それにワルツと違って、二人一緒に進んでいく感じが好きだった。

ただ、こういう場ではやっぱりワルツが一般的だ。だから、口に出して言ったことはなかったけど、アルにはすっかりお見通しだったらしい。

※

音楽に乗り、風を切る勢いで進み。

……身を寄せて、視線を交わし。

僅かに上体を反らし、握る手に少しだけ力を込めて回り、進行方向を変える。

正直、失笑覚悟だったが、主役の二人が笑顔と拍手で迎えてくれたおかげか、男同士のタンゴでも好意的に受け入れられた。それに内心、安堵しつつもオレは皆から離れたところで、アルの腕を肘で突いた。

「……で？ どういうつもりだよ、アル？」

「んー……虫除けしようかなと」

「……………は？」

笑顔での答えに首を傾げたが、見るとあれだけ色めき立っていた女性陣が、今は遠巻きにオレ達を見ている。妙にうつとりしてるんで退かれてはいないようだが、確かにいきなりあれだけ踊られては、声もかけにくいだろう。

「いくら好みの相手がいないからって、やり過ぎだぞ？ これから声かけにくくなっても、知らねーぞ？」

人が真面目に心配してるのに、アルはと言うと笑うのをやめて深々とため息をついている。そして、チラッと

オレを見たかと思うと。

「……本当、自覚無いんだから」

「あ？」

「まあ、だからこそ兄さんなんだけどね……あ、一つだけ訂正しとくよ」
意味不明なことを呟いて、にっこりとアルは笑った。

「カツコよく、エスコートしたいのはね……兄さんを、だよ」

タンゴ イン エデン

発行日 2022年9月10日

著者 あずま渡里

<https://www.pixiv.net/member.php?id=3229042>

連絡先 contact@rainbow.sakura.ne.jp

印刷 シメケンプリント / かんたん表紙メーカー

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
